



交野に残る 家康の足跡



おだのぶなが とよとのおひでよし
織田信長、豊臣秀吉と並ぶ三英傑
とくがわいえやす
の1人、徳川家康。交野市は家康の
人生に度々かかわっており、今も史跡
が残っています。家康ゆかりの地ととも
に交野市とのつながりを紹介します。

市橋長昭による石碑建立

いちしながかつ
市橋長勝から数えて8代目の仁正寺藩主となったのが
いちしながあき
市橋長昭です。幕府内でも有数の文化人で幕府官僚として
も優れており、23歳の若さで西国支配の拠点であった大
坂城を管理する重要な役職、大番頭を務めました。
おおぼんがしら

大番頭の職にあった寛政11年(1799)に、長昭は江戸時
代をとおして市橋家の領地であった星田を巡検(領主が領
地をめぐり、現地確認を行うこと)しました。この時、長昭
は、荒れ果てた御殿跡の姿を目にします。幕府の神祖・家康
と自らの祖先に関わる重要な史跡の荒廃を悲しんだ長昭
は、後世に事績を伝える碑を建立することを思いつきます。



権現様御由緒書 表紙(守口文庫蔵)
※権現様(徳川家康)と星田村の由緒を
平井三郎衛門が記した文書

石材調達に奔走した星田村の人々

星田巡検から数年後の享和3年(1803)、星田
村の役人が仁正寺藩陣屋へ呼び出され石碑建
立を命じられました。この際、長昭の意向によ
り、後世に長く神祖の業績を伝えるため、風雨
に耐える強い石を用意することが求められま
した。石材調達を担当したひらいさぶろうえもん
平井三郎右衛門は良
質な御影石を調達しようと、西宮の山を搜索す
るも石を得られませんでした。その2日後、西宮
にいる親族に案内してもらい五田浜でようや
く石碑に適した御影石を発見。運搬作業が行わ
れ、星田村中総出で御影石が引き取られました。

その後、碑石の台石となる花崗岩を星田山中
の抜谷で切り出し、御殿跡に運びこみました。
こうして、家康と星田の由緒を伝える石碑設置
の準備が整えられました。



権現様御由緒書で描かれた御殿跡(守口文庫蔵)